# 狂犬咬傷治方

狂犬咬傷治方

麻布大学所蔵

江都連石呂先生嘗攜狂犬咬
傷治方一篇業行于東方人被其惠
業丙子先生浴有馬溫泉路出大阪
謂余曰此書未行西方迄鈴木俊民
欲重梓此地子盍序諸余素拙措
辭人乞有求皆堅拒不應然竊喜

此出之傳海內也乃屬和文一章以塞
其責先生又書曰江都合改爲漢文
不可辭乃取前文自擇曰蓋洞上世
大之彥三神相與經營國家又
設醫藥以除蒼生及禽獸之疾
其來也遠矣近世風犬之禍不
去治方者坐候其斃雖苟知之藥
材不可輒得則亦已矣於是乎輯單
方美平加以治風犬之術以經三神之
績也嗟夫汗牛充棟唯吳子未若
世或有爲此書僅一小冊乃能起死
回生其爲賜也鞀矣長木之鞀無不

# 標國狗之疾無不噬世人宜察

一本以應卒云寶暦丙子季夏朱

阪五井純禎書



それ狂犬乃人を咬ること吾邦古来まれなる
ことなれども近年実邦よりしけ病ひつゝて西國より
けまて中國上方へ移りたるゆえ東国へも移り
しけ犬ふくれたる人傷わるゝときハ二三日あるい
もの毒又きぶんあるときハけだの毒いまをやぐて
いゆゑもてるゆ人輕きとて初ひく治療に
及ばずおけい日を屈て病れり十よ
八九ハ死をもやく治療をくゝて死をはな

ゟ除へをとなり是を治するの法古今諸方書に
のせ載たり然ともを方内治外治多く
多くして古くハ用ることし有よ古来更に
試をかるを勧ひく且菜乃求めさ試今
古よ撰ひく毒ハ毒を略を食ゟ禁忌
いなり中ゟ毒ハ洋よ毒を大切よ慎む
一一醫を業とするものハ数子書乃ゟを
日夜を術を講習すゟ

及を俗人ハを治療ゟ方をゟさゆへを〻て食物
失ふものとなんふを一冊を梓りして世傳
を度ひふと志ゟ
一凡犬けを病をはふを狂犬癲犬風犬猘犬ゟ云皇
の先かゟを眼ひく食をくらを人をさけ身を
かくをこしふ狂ゟ人ゟ犬を治する法
枸杞乃實をすりけぶしを汁ゟて粥を煮細ふ
乃ゟ多くいぶるハ埼を中ゟ移ゟしむれ

ハよく含ふものなりかゝるとけ病をまぬかるゝ
又或ハ舌を出し目くるめきよだれをながし腰をゐ
ゐてそを尾をたるゝいつまゝ牡犬乃ゝうちなり
人ゝれを見ばたちやく目ハーのれさりまゝふ
杖をもちゆ世ぐべしあふ恨してくるまゝ
療治をなるゝれすれハ必ゝをゝるゝ乃ゝ
一牡犬小便まゝゝハちやく瘡口乃血と吸去
屋一面泉に浸せて止るゝれゝまゝづく

吸ゝさ不なゝハ人ゝまゝ出しゝ毒ゝ
吾ゝをゝれ又血おさるハ針をさし血をとゝ
ゝゝ

一杏仁をゝゝ解乃ゝくゝ大さハ瘡の
大小ほゝ厚さ一分斗を瘡口ふさ
ゝ上ゝ艾炷を大ゝて十壯灸ゝ
次の日ゝ二壯ゝ百日ゝ毎ゝ灸ゝ
一日ゝ欠ゝなれ是一社ゝ方也

此法法書よのせておげ〜かくのごとく杏仁の内へ虎骨或ハ虎牙
或ハ猪牙を入れ〜或ハ豆豉韭根を合するもあり〜合
おくべきなれハ暗く又杏仁解を煮て疫の上ゆ煮
灸するはしり〜或ハ生姜を煮て葱白を煮はち〜いつれも
〜法乃内ハ外法乃妙法多〜ものもまゆく灸ゆるゆ
宮さられ〜一切獣咬及悪虫毒蛇乃さし〜るに其咬所ゆ
灸をれハ毒家散して害とのこさをそれをいく犬咬も灸て
〜ハるさてをもるへし

一杏仁をいつすりゆを入ちてけをゆ塗
毒〜又灸て毒ゆ
一杏仁をすり疫ゆ
いつへ物さてをし

一咬まてゆ七ちてて灸ゆ豉をゆの灸三七
豉をゆれ〜百日ゆ過てゆ〜がなをハ全く金
物ゆ毒ゆへ〜七ちゆ〜韭の煮〜けを茶碗
ゆ一重ゆ〜茶ゆ〜或ハ毎日一重ゆ〜のめば〜く
〜ゆ灸ゆ時ゆ根をゆて搗けゆ
絞をゆ〜疫いゆく豉豉をゆゆ〜ゆ
なり

一山野人家なさ不て咬毒灸法ゆ法と

ふかきよあり〳〵さ尉ハ冷水にて瘡をよくあらひ洗ふ〳〵血の出るを待べし〳〵ふせぎてもるるもれ又瘡大なるハ流血ゆるをすもし血止りてほるをこさずにあらてもれ紙又ハまぐひにて〳〵はる風の入ぬやうにして大〳〵

一地榆根をはさき瘡ふたけ又汁を飲ム一生なるものハ乾菓を粉にして はけ又

さゆにて一日に三度はる〳〵百日ゟ百度てら

一頭髪蝟皮當分燒為末ゑて一ゑを飲へし或ハ為人目ハ〳〵口噤ものハ歯を折て灌いれる〳〵乳なり

一莨麻子五十粒殼をさりをとりすり塗ゑて瘡をあらひ付て〳〵

一梔子黄燒硫黄二味當分粉にして瘡ゑ付て〳〵

一蚯蚓糞水よりさ泥のごとくして瘡ふたぐもの
上より毛生ずるなり何度ぬるべし
一蝦蟇をとりて皮を剥きて切て蒜韮ちりを
入腎ぬりてくりむ又焼灸しても合ずもし
又黒焼にして食のうへゆきて出てしまい
受事に付用意いかさまにて
はぬりて乳みも抜てしまうと云
一瘡いつてはなちひ豊ちうよハ生姜汁を

飲てしまう
一頭垢を瘡の内へ入てしまう
一砂糖を水に調瘡より内へ入て又砂糖ゑ一二度
とかしてしまう
一乾姜乃末を書に付し又瘡の内へ入てしまう
一明礬を水にして瘡中よい迄たてしまけぞ
瘡くづまでいへ中よい迄
一咳ひたれ大を殺し脳をとりて瘡ゑ

かゝりて物をとる

一馬錢子一文酒にて水にて服して

一咬所へ人糞或ハ犬糞或ハ牛糞をつけく

附て

一咬まれて腫たるをすびく毒を治し

くすに用て極て

雄黄五文　麝香一文　二味研その上に附て

二文用ゆる毒人服するとき直に

[illegible]

[illegible]を灌くし菓をけるべて

[illegible]

[illegible]大便悪物を下せば

[illegible]前の菓を

一傷とかゝる人狂犬風犬のくちのさを

[illegible]ハ虎牙或ハ虎骨を割飲して

一毒氣發し狗乃鳴くし或ハ毒攻

て煩乱悶絶し百方治るものハ人骨灰

あり斗ゆゑ用ひてよし

一斑猫の入薬して毒を小便より下す方後書

ふ載て甚切なる成論也 斑猫

乃毒大ふ人を害なり是その斑猫書時

ふ載なり今ふ載くるなり又右乃法方を

用て効なれとも毒なり考用少し

毒方和薬ゆ詳なり

一病人頭項上にあり髮ともなるもの

ちゝくゆさけなく

一風をさけ静なるゆゑ居て書作す

一厚味なる物 ちゝさもの 生なる物 小豆

生菜 豚さもの 臓さもの 百日内用ひし

一魚 獣 魚 油臓 酒 壱年の内用ひし

一狗肉 蠶蛹 落葵 一生用ひし

ふるれを打て ふくび出れば ふれも

ふを決して 敷 ふを 壱屋

右、諸方法、病源候論 肘後方 千金方 外臺
秘要 文仲方 備急方 小品方 崔氏方 効方
古今錄驗方 袖珍方 簡便方 救急方 經驗方
及元明之諸方書所載也 拙もども或は採
或は略して甚異同あるあり 依り我
考合てたゞぶかい補ひ 彩るこい割 甚要
をもとめて用ゆるもの也
元文元年丙辰初冬日野呂元丈實夫撰

附録

一狂犬に咬まれて自愈て後大熱發し瘡いでむとすれハ
毒氣内を攻むるゆへ瘡ハ狹猥一盃飲へし忽ちふ熱解
瘡再び發し膿汁出て毒全發るゆへ咬まれるとなく狹
猥を飲べ愈て
一山中に狂狼有て人畜害をなす又狂犬の治方と異なゝ
ちゝんなるべかゝに
一鼠に咬まれるにもちやく灸をべし樺皮煎して洗ふもよし
毒鼠小く大熱發るゆへ黑豆大山梔子草各中藥服瘡愈る
後山桃を食へハ又發を一生忘むへし 又方 胡枝花の葉をく
搗研瘡の上ふ塗るぬし図數を用へ茲に記す

此書ハ元文丙辰年東都醫官野呂元丈先生著述
せり其比東國に狂犬流行して咬傷多く者多く
死を此書一ゝび出てより今試全する者数をも
ど余大坂ゟ備居もるかたと十餘年今狂犬絶
ずして死する者ゆゝびたこのまでも此書京大坂ゟ求る
ひとゝなるべ實ゟ海世第一の好書なり年来此書と重
刊せんゝの志ありき幸にたゝ先生有馬入湯ゟ日旅館
ゟ詣ゝで此書を書く世にたゝちんと願ひれで則許容

十一

し申ゟ市中及山家まてを此書試求ゆきて治方を
施さば狂犬乃難なるべしと希ふものかゝ

寶暦六年丙子初秋

大坂

鈴木俊民士興藏版

大坂書林　柏原屋與左兵衛門